

授受動詞の分類について

ーヤルとアゲルの意味的差異を中心にー

徳永 千枝子

(九州大学大学院)

chieko_toku_116@ybb.ne.jp

キーワード：ヤル構文とアゲル・クレル構文、一人称制限、話者の主観的共感

1. 問題提起

日本語の授受動詞（3系列7形式）は同種のふるまいをするもの、その語彙的性質において同じクラスに分類されるものとして扱われてきた。すなわちアゲル・クレル・モラウの3系列とその待遇的変異形ヤル・サシアゲル・クダサル・イタダクである。更にその各々について、補助動詞用法として動詞のテ形に後接させる形式があり、従ってこれも本動詞の場合と同様3系列7形式だと考えられてきた。

- (1) （事態：「与え手」の太郎から「受け手」の次郎へと「本が移動する(a)」または「本を読むことの恩恵が移動する(b)」。主語は「与え手」）
 - a. 太郎は 次郎に 本を あげた。
 - b. 太郎は 次郎に 本を 読んであげた。

- (2) （事態：同上。主語は「与え手」）
 - a. 太郎は 次郎に 本を くれた。
 - b. 太郎は 次郎に 本を 読んでくれた。

- (3) （事態：同上。ただし、主語は「受け手」）
 - a. 次郎は 太郎に 本を もらった。
 - b. 次郎は 太郎に 本を 読んでもらった。

[「待遇的変異形」の例文は、ここでは省略する。]

先行研究の分析に従い、これらの関係をまとめると、おおよそ次のようになる。

(4) 授受表現の分類

	[与え動詞]		[受け動詞]
[与え手視点]	: アゲル (ヤル・サシアゲル)	⇔	?
[受け手視点]	: クレル (クダサル)	⇔	モラウ (イタダク)

[() 内は待遇的変異形。補助動詞用法の場合、～テアゲル (テヤル・テサシアゲル) ・～テクレル (テクダサル) ・～テモラウ (テイタダク) の3系列7形式になる。]

日本語の授受表現に関する先行研究には、松下(1928),宮地(1965),大江(1975),久野(1978),上野(1978),寺村(1982),奥津(1983),益岡・田窪(1992),山田(2004)など、数多くの多方面からの研究がある。そのうち最も初期の研究である松下(1928)においてもすでに、この3系列の表現はまとめて扱われ「利益態」と呼ばれていた¹。

山田(2004)によれば、ヤル・クレル・モラウがまとめて扱われる理由は、いずれも受け渡される物が受け手にとって好ましい事物であると基本的に話者が認識していることと、補助動詞としての用法を持つ点が大いとしている。しかし同時に、このような三項対立²を持つ言語が極めて稀であること、世界の30あまりの言語から得られたデータをもってしても、日本語は授受動詞に関して類型論的に見て極めて特異な言語であることについても言及している [山田(2004:332-355)]。

一般に授受動詞というものは、与え動詞と受け動詞の二項対立または両者が未分化な一項対立である言語がほとんどである。奥津(1983)での対照研究にもみられるように、韓国語・中国語・英語においては概ねどれも日本語のヤルとモラウの関係にあたる二項対立になっており、また基本的に対立をなさないいわゆる一項対立ともいふべき言語としては山田(2004)においてサンスクリット語・チベット語などが挙げられている。さらに日高(1997b)では、日本語の方言に関しても九州地方の西半分と中部地方より東側についてはヤル・クレルは分

¹ 「～テヤル=自行他利態」「～テクレル=他行自利態」「～テモラウ=自行自利態」の3系列が授受表現にはあるとする。松下(1928)は、受身文とテモラウ文との比較を行うとともに、人称と視点の制約について初めて言及した。

² 山田(2004:16)では、ヤル・クレル・モラウの三項対立について、「ヴォイス的要因」と「話者視点からの方向性と呼べる要因」の二つの要因が十字分類として掛け合わされた結果、生じたものとしている。

化せず、ともにクレルで表されると述べ(つまりクレル・モラウの二項対立)、現代日本語の標準語だけが三項対立になっていることを示唆している。

なぜ日本語のそれも標準語だけが、アゲル(ヤル)・クレル・モラウの三項対立になっているのか。多くの言語において現象としては同一である出来事を、その出来事に含まれる動作・行為をなす側とそれを受ける側とを、それぞれ主語にして表現する手法が存在する〔山田(2004:16)〕のは至極当然のことといえる。日本語の授受動詞でいえば、ヤルとモラウの二項対立関係がこれにあたる。しかしそれに上乘せする形で、現代日本語の標準語だけが複雑な三項対立を生じているのである。これはかなり不自然なことであると考えられる。

2. 主張

そこで本論文では、まず日本語の授受動詞というものを次のように定義する。

- (5) 授受行為の与え手側・受け手側それぞれを主語として表現する手法、すなわちヴォイス対立だけに関係するものを、授受動詞と呼ぶ。

その上で従来、授受動詞としてまとめて扱われてきた授受表現アゲル(ヤル)・クレル・モラウを、以下に示すように語彙的意味・性質の異なる二つのクラスに分けることを提案する。

- (6) 本論文での授受表現の分類

A. 授受動詞

[与え動詞]

ヤル

⇔

[受け動詞]

モラウ(イタダク)

[() 内は待遇的変異形。補助動詞用法の場合、～テヤル・～テモラウ(イタダク)の2系列になる。]

B. 話者の主観的共感を表す動詞

[与え手への話者の感情移入] : アゲル(サシアゲル)

[受け手への話者の感情移入] : クレル(クダサル)

[() 内は待遇的変異形。補助動詞用法の場合、～テアゲル(テサシアゲル)・～テクレル(テクダサル)の2系列になる。]

このように分類し、アゲル・クレルを授受動詞の範疇から外し、ヤル・モラウだけを日本語の授受動詞と考えることで、他言語の授受動詞体系のほとんどが二項対立であることと整合的になる。

更にこの分類の根拠として、次のような言語的特徴を指摘したい。

- (7) ヤルとモラウは互いにヴォイス的対立関係にある一般的な意志動詞であるが、アゲル・クレルは一人称使用に関して強い制限を持つ、極めて特異な動詞であること。
- (8) ヤルとアゲルの違いは待遇的差異ではなく、「話者の主観的共感」という別の要因が関わっている可能性があること。

では、言語現象（例文）を挙げ、具体的に説明していく。

3. 説明

3.1. 一人称に関わる容認度の低下

まず、一人称の関わっている授受表現の例文をいくつか挙げてみる。

(A クラス)

- (9) a. 私は 太郎に お金を 送ってやった。
 b. ??太郎は 私に お金を 送ってやった。
- (10) a. 私は 太郎に お金を 送ってもらった。
 b. ?太郎は 私に お金を 送ってもらった。

(B クラス)

- (11) a. 私は 太郎に お金を 送ってあげた。
 b. *太郎は 私に お金を 送ってあげた。
- (12) a. *私は 太郎に お金を 送ってくれた。
 b. 太郎は 私に お金を 送ってくれた。

ヤル・モラウ・アゲルは、いずれの場合も非主語に一人称「私」がくると容認が難しくなり[(9b)(10b)(11b)]、クレルの場合は主語にくると容認が難しくなる[(12a)]。つまり、授受表現には共通して一人称に関わる容認度の低下がみられる。

しかし更に詳しくみると、ヤル・モラウ (A クラス) に生じる容認度の低下とアゲル・クレル (B クラス) に生じる容認度の低下は、振る舞いが異なる。次の例文を見てほしい。

(A クラス)

- (13) a. 私は 太郎に お金を 送ってやりたい。
 b. 太郎は 私に お金を 送ってやりたがっている。
- (14) a. 私は 太郎に お金を 送ってもらいたい。

b. 太郎は 私に お金を 送ってもらいたがっている。

(B クラス)

(15) a. 私は 太郎に お金を 送ってあげたい。

b. *太郎は 私に お金を 送ってあげたがっている。

(16) a. *私は 太郎に お金を 送ってくれたい。

b. 太郎は 私に お金を 送ってくれたがっている。

ヤル・モラウ(A)では非主語に一人称がくる場合でも、今度はすべて明確に容認可能になる[(13b)(14b)]。ところがアゲル・クレル(B)では、やはり不適格なままである[(15b)(16a)]。

3.2. ヴォイス的対立に関わる制限を持つヤル・モラウ

実は、ヤル・モラウの持つ制限とその解除は、例えば「教える・教わる」のようなヴォイス的対立[山田(2004:16)]の関係にある動詞の持っている制限と、同質である可能性が高い。

(17) a. 私は 太郎に 英語を 教えたい。

b. 太郎は 私に 英語を 教えたがっている。

Cf. ?太郎は 私に 英語を 教えた。

(18) a. 私は 太郎に 英語を 教わりたい。

b. 太郎は 私に 英語を 教わりたがっている。

Cf. ?太郎は 私に 英語を 教わった。

(13b)は(17b)と、(14b)は(18b)と全く同じ振る舞いを示している。つまり、ヤル・モラウはヴォイス的対立関係だけを持つ意志動詞、すなわち本論文で定義するところの「授受動詞」であると考えることができる。

3.3. 一人称制限を持つアゲル・クレル

一方、アゲル・クレルについてはどうだろうか。(11b)(12a)および(15b)(16a)については、明らかに不適格・非文法的だと感じられる。「(誰かが)私に あげ/あげたがって」たり、「私が(誰かに)くれる/くれたい」のは、語彙の使い方自体を誤っている、アゲルとクレルとを逆に使っていると判断されてしまうのである。つまりここで分かることは、アゲル・クレルの持つ性質はヤル・モラウの持つ性質と、意味のレベル上、全く違うのではないかという可能性である。

アゲル・クレルは後続部の文法的影響を受けにくい、強い「一人称制限」を持っていると考えられる。その一人称制限とは以下のようなものである。これまで先行研究で述べられてきた「視点制約」³とは、やや考え方を異にするため、ここで新たに提案しておきたいと思う。

(19) アゲル・クレルの「一人称制限」

1. アゲル・クレルは、構文レベルでの一人称制限をもつ。
2. アゲル文は非主語に、クレル文は主語に一人称を使用した場合、その文は非文法的になる。
3. アゲルとクレルの関係は、相互補完的である。

3.4.ヤルとアゲルの意味的差異

では、この「一人称制限」は具体的にどのような構文的意味を導いてくるのだろうか。そこでまず、従来、待遇的差異があるにすぎないと考えられてきたヤル(Aクラス)とアゲル(Bクラス)を特に取り上げ、その二つの意味を比較検討することにしてみたい。その場合、一人称の関わっていない例文を取り上げることで、よりはっきりとした意味の違いを提示できるものとする。まずアゲルの意味の一端を探り、そののちクレルの意味についても考察を広げていく。

久野(1978)では、ヤルに関する例文について次のような容認度を示している。

(20) ??太郎は 花子が貸してやった自転車を 修繕してやった。[久野:156(15)]

ここでは、主文における「太郎」の視点と名詞修飾節における「花子」の視点

³ 久野(1978)では、動詞や補助動詞のもつ「視点制約」と名詞句の「視点ハイアラーキー」との間に「視点の一貫性」があるか否か(共感度関係に論理的矛盾がないかどうか)によって、文の容認可能性が決まるとしている。

「(テ)クレル・(テ)ヤル」の視点制約

クレル : E (与格目的語) > E (主語)

ヤル : E (主語) ≥ E (与格目的語)

テクレル : E (非主語) > E (主語)

テヤル : E (主語) > E (非主語)

なお、アゲルの視点制約については、特に述べられていない。

という、相異なる二つの視点が一文の中に存在するため、久野のいう「視点の一貫性」に矛盾が生じ、容認が難しくなっていると考えられる。ところが、待遇的にヤルよりやや高く遇する意味を持つとされてきたアゲルを主文のヤルと置き換えると、文は一転して容認可能になる。

(21) 太郎は 花子が貸してやった自転車を 修繕してあげた。

もし、アゲルがヤルと待遇的な違いがあるだけで本質的な意味に変わりがないのならば、(20)と(21)の容認度も変わらないはずである。つまりこのことは、3.3節でもすでに言及したように、アゲルがヤルと本質的な意味のレベルで異なる性質を持っていること、待遇性とは異なる何か別の要因が関わっていることを示唆しているものと思われる。

3.5.話者の主観的共感

それでは待遇性とは別の、ヤルには関わらずアゲルだけに関わる要因とは、いったいどのようなものなのだろうか。(20)のヤル文がどちらかといえば「太郎」の行為について「太郎」の立場から客観的に描写することを目的としているのに比べ、(21)のアゲル文では話者自身が前面に出て、その主観を述べようとしているものと思われる。そのため例えば、与え手側の感情移入に関わる副詞句「せっかくだから」などと共起しやすい。

(22) 太郎は 花子が貸してやった自転車を せっかくだから 修繕してあげた。

従って(20)ヤル文においては、主語「太郎」の立場（視点）に文を統一できなかったことが容認度の低さの原因になっているが、(21)や(22)のアゲル文においては、そのことは文の容認度に関与していない。主語の視点そのものよりも、話者が主語の意志に感情移入し「（せっかくだから）～てあげた」と主観的に共感していることを聞き手に表明することの方が、この文の主要な目的であるためと考えられる。

同様のことは、従来もう一つの与え動詞として扱われてきたクレルについてもみられる。

(23) 太郎は 花子が貸してやった自転車を 修繕してくれた。

ここでは主文における視点は非主語「花子」であるため、名詞修飾節における「花子」の視点と一致し、「視点の一貫性」にも全く矛盾がない。しかしここ

で重要なことは、(21)と(23)が同じ出来事（太郎が、自転車を貸した花子のために、その自転車を修繕する）を表し得ているにもかかわらず、その意味・伝達内容が異なっていることである。

(23)文でもやはり(21)文と同様、話者自身が前面に出てその主観を述べようとしているものと思われる。そのため例えば、受け手側への感情移入を表す副詞句「ありがたいことに」などと共起しやすい。

(24) 太郎は 花子が貸してやった自転車を ありがたいことに 修繕してくれた。

つまり(23)文が(21)文と異なるところは「(ありがたいことに) ~てくれた」と、話者が非主語「花子」の方に感情移入し、その期待・感謝の気持ちに共感していることなのである。その証拠に、以下に示す例文のように、アゲル文とクレル文の副詞句を互いに入れ替えて使用すると、一転して容認が難しくなってしまう。

- (25) a. ??太郎は 花子が貸してやった自転車を ありがたいことに 修繕してあげた。
b. ??太郎は 花子が貸してやった自転車を せっかくだから 修繕してくれた。

よってアゲル文とクレル文は、「話者の感情移入・共感」に関して相互補完的な意味内容を表していることになる。以上をまとめると、次のようになる。

- (26) 話者の主観的共感を表す動詞
a. アゲル：恩恵の「与え手」への感情移入（与え手の意志に共感）
b. クレル：恩恵の「受け手」への感情移入（受け手の期待・感謝に共感）

ここにきて初めて、なぜアゲル・クレルだけに(19)のような「一人称制限」が存在したのか説明がつく。アゲルは「与え手」への話者の共感を表す動詞であるため、話者が文中に現れる場合（つまり一人称「私」）は「受け手（非主語）」には決して立たないのである。同様にクレルも、「受け手」への話者の共感を表す動詞であるため、今度はアゲルと相互補完的に「与え手（主語）」の位置に決して立たない。つまり、アゲル・クレルの持つ構文的意味が、「一人称制限」という構文レベルでの文法制約につながっているのだと考えることができる。

4. 今後の課題

このように、アゲル・クレルの持つ構文上の制約というのは、「視点のあり方」よりも動詞自体の意味から発生している可能性が高い。従って 3.4 節・3.5 節でみてきたように、「与え手」「受け手」の双方が語彙的に同等で、久野(1978)のいう「視点ハイアラキー」に関する言語上の手掛かりがないような三人称である場合でも、その容認度は決定され得たのだとも考えられる⁴。

今後は、話者の主観的共感を表す動詞「アゲル・クレル」とは具体的にどのような性質のものなのか、更に詳しく検討していきたい。特に、謙譲動詞や尊敬動詞との関わりについて留意していきたいと考えている。

謝辞

本稿は 2010 年 1 月に九州大学に提出した修士論文『授受動詞アゲル・クレルの意味特性と話者の視点』の一部を加筆・修正したものです。修士論文作成の過程で御指導いただきました九州大学言語学研究室の先生方に、心より感謝申し上げます。また本稿を執筆するにあたり、匿名査読者の方からは多くの貴重なコメント・ご助言をいただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

参考文献

- 上野田鶴子(1978)「授受動詞と敬語」『日本語教育』35:40-48.
大江三郎(1975)『日英語の比較研究：主観性をめぐって』東京：南雲堂.
大江三郎(1977)「コンテクストと文法(5)(6)」『英語青年』123(3),123(4).
奥津敬一郎(1983)「授受表現の対照研究―日・朝・中・英の比較―」『日本語学』2(4).
奥津敬一郎(1986)「動詞の形態論 やりもらい動詞」『国文学 解釈と鑑賞』51(1)：96-102.
金水敏・今仁生美(2000)『意味と文脈』，現代言語学入門 4. 東京：岩波書店.
久野すすむ(1978)『談話の文法』東京：大修館書店.
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房.
鈴木丹士郎(1972)「動詞の問題点」『品詞別日本語文法講座 3 動詞』明治書院.

⁴ 久野(1978)では、三人称間の「視点ハイアラキー」として、「対称詞の視点ハイアラキー」と「談話主題の視点ハイアラキー」の二つを挙げている。しかし、それ以外には特に示されていない。また寺村(1982)においても、「与え手・もらい手」についての人称制限は「ウチ・ソト」という話者を中心とした相対的な基準によって決まるとされているが、語彙的に同等で言語上の手掛かりがない場合については言及されていない。

- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版.
- 豊田豊子(1974)「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1.
- 仁田義雄(1989a)「現代日本語の文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- 沼田善子(1999)「外界認知と言語—授受動詞文と対人認知」『日本語学』18(8): 46-54.
- 日高水穂(1997b)「授与動詞の体系と変化に関する方言対照研究」博士論文, 大阪大学.
- 堀口純子(1987)「意志動詞と無意志動詞の意志に関する一考察～「クレル」を中心に」『文藝言語研究言語篇』12. 筑波大学文芸・言語学系.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『改訂 基礎日本語文法』くろしお出版.
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』中文館書店.
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
- 宮地裕(1965)「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63:21-33.
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ：「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』東京：明治書院.
- 由井紀久子(1990a)「受給動詞の意味」『STUDIUM』17. 大阪外国語大学大学院研究室.

The classification of Japanese Benefactives -Focusing on “Yaru/Ageru”-

Tokunaga Chieko
(Graduate School of Humanities, Kyushu University)

The purpose of this paper is to clarify the property of Japanese benefactives, focusing on “ageru/kureru” sentence structure. After the contrastive analysis between “yaru” and “ageru”, the result showed that Japanese benefactives are classified two groups, “yaru/morau” (A-group) and “ageru/kureru” (B-group).

A-group describes the giving and receiving act as objective expressions. B-group describes the speaker empathy as subjective expressions.

(初稿受理日 2014年 3月 11日 最終稿受理日 2015年 1月 29日)